



アンチ・ドーピング を通して考える

—スポーツのフェアとは何か—

公益財団法人 日本アンチ・ドーピング機構 監修

アンチ・ドーピングを通して考える

—スポーツのフェアとは何か—

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構 監修





輝く日本のアスリートたち







はじめに

この冊子を手に行っているみなさんは、保健体育の授業、部活動、地域のスポーツクラブなどで、日々、スポーツに携わっていることと思います。

そして、スポーツを通して、ルールを守ることの大切さ、チームワークの大切さなど多くのことを学んできたのではないのでしょうか。また、スポーツを通して、忍耐強さを身につけたり、一生つきあえる友達と出会ったりした人もいることでしょう。

では、なぜ、スポーツによって単なる技術の習得だけでなく、多くの恩恵がもたらされるのでしょうか？……それは、みなさんが決められたルールに従い、そのスポーツに全力で打ち込んできたからです。仮に、ルール違反をしてみても、勝利にこだわったとしましょう。結果的に勝負に勝ったとしても、何か罪悪感が残るのではないのでしょうか。

この根幹にあるのが、「フェア」という理念です。本書は、みなさんに、この「フェア」という観点からスポーツを捉えなおし、アンチ・ドーピングについて理解してもらうことを目的に作成しました。

本書は、第1章「スポーツの精神・価値」、第2章「スポーツ共通の全世界的なルール」、第3章「競技スポーツをする人が注意すべきこと—医薬品とサプリメント—」の3章から構成されています。

第1章では、オリンピック・ムーブメントにおいてスポーツの価値の基盤となる、「Excellence（自己を信じて、最善を尽くすこと）」、「Friendship（仲間を信じること）」、「Respect（他者を尊敬すること）」について、多くの事例から、理解を深めることができます。

第2章では、アンチ・ドーピング活動とはどのような活動であるのかについて、具体的な事例を学ぶことができます。さらに、アンチ・ドーピング活動を学ぶことを通じて、みなさんがどのような存在となるべきか、何を目指すべきかについて学ぶことができます。

第3章では、医薬品やサプリメントの適正な使用に関して、アスリートを目指す人々が注意すべきことについて、アンチ・ドーピングの視点から紹介しています。

最後に、アスリートを目指すみなさんが、指導者や保護者と共に本書を有効に活用し、アンチ・ドーピングを通してスポーツの価値の理解を一層深め、スポーツを通じた社会の発展に寄与されることを切に願っています。

目次

第1章 スポーツの精神・価値…… 7

- 1 自己を信じて、最善を尽くすこと (Excellence)…… 10
- 2 仲間を信じること (Friendship) …… 14
- 3 他者を尊敬すること (Respect) …… 18

第2章 スポーツ共通の全世界的なルール…… 23

—スポーツの固有の価値を守るアンチ・ドーピング活動の推進—

- 1 世界中のすべてのスポーツで同じアンチ・ドーピングのルールが適用されるのはなぜ? …… 24
- 2 世界的な規模で遵守されるアンチ・ドーピングのルール…… 29
- 3 ドーピングの「ルール違反」—何が違反とされるのか? …… 34
- 4 スポーツの価値を高めるために
—すべての人が真のチャンピオンになることを目指して…… 36

第3章 競技スポーツをする人が注意すべきこと…… 39

—医薬品とサプリメント—

- 1 競技スポーツをする人が注意すべきことは? …… 40
- 2 スポーツファーマシスト…… 45



第 1 章

スポーツの精神・価値

TOPICS

スポーツでは勝利を目指し、自身が優位に立とうとします。しかし、あえてそれをしなかった選手がいます。1984年ロサンゼルス・オリンピックの柔道の男子無差別級決勝戦で、山下泰裕選手と対戦したモハメド・ラシュワン選手（エジプト）です。

この大会、山下選手は、軸足となる右足のふくらはぎを肉離れしたまま決勝戦を戦いました。ラシュワン選手は、山下選手の右足を攻めず、あえて自分に不利な技をしかけました。結果は、抑え込みで山下選手が金メダルを獲得しました。試合後、ラシュワン選手は「私にはイスラムの誇りがある。そんなアンフェアな戦いはできない」と答えたといえます。ラシュワン選手は、ユネスコ・フェアプレイ賞に輝きました。



伝説のフェアプレイと語り継がれる山下選手とラシュワン選手の試合

* 1 世界アンチ・ドーピング機構（World Anti-Doping Agency=WADA）が定めた世界ドーピング防止規程（World Anti-Doping Code）は、2003年1月1日に採択され、2004年1月1日より発効、現在、第2版が2009年1月1日より施行されている。

「フェアプレイ」と聞いて何を想像しますか。また、スポーツの価値を身近に感じたことがありますか。人は、スポーツをしたり、見たり、支えたりすることで、実に多様な価値にふれていきます。「世界ドーピング防止規程」* 1 は、そのようなスポーツの多様な価値を、表1の11項目にまとめています。

表1 スポーツの多様な価値

- ・倫理観、フェアプレイと誠意 (Ethics, fair play and honesty)
- ・健康 (Health)
- ・優れた競技能力 (Excellence in performance)
- ・人格と教育 (Character and education)
- ・楽しみと喜び (Fun and joy)
- ・チームワーク (Teamwork)
- ・献身と真摯な取り組み (Dedication and commitment)
- ・規則・法律を尊重する姿勢 (Respect for rules and laws)
- ・自分自身とその他の参加者を尊重する姿勢 (Respect for self and other participants)
- ・勇気 (Courage)
- ・共同体意識と連帯意識 (Community and solidarity)

これらの中でも、フェアプレイは、倫理観や誠意と並んで表記されるように、スポーツの精神・価値の中でも最も重要な価値といえます。

フェアプレイは、自分の行動が他の人々にとって重要な意味をもつことを知っていることを前提にしています。アスリートは、他のプレイヤーに対して親密かつていねいに振る舞うなど、プレイをする際にフェアに振る舞う責任があるのと同様に、他の人たちからもフェアに扱われる権利をもつことになります。

このようなフェアプレイを構成する要素が、自己を信じて、最善を尽くすこと (Excellence)、仲間を信じること (Friendship)、他者を尊敬すること (Respect) の三つです。

スポーツの世界では、今日、アスリートのみならず、

コーチやスタッフが、定められたルールに基づき、最高の結果を求めて常に最善を尽くしています。その結果としてアスリートは、^{たくえつ}卓越したパフォーマンスを発揮することになります。私たちは、その過程にみられたアスリートやコーチ、スタッフそしてアスリートの家族らの努力を知れば知るほど、優れたパフォーマンスに感動することになります。

同時に、共通の目標達成に向けた取組みの過程を共有することで、アスリートやコーチ、スタッフの間には信頼関係が生み出され、互いの友情も育まれていきます。

この過程ではまた、対戦相手や審判に対する尊敬の念もつちかわれていきます。「ライバルがいたから私はここに到達することができた」「あの審判のフェアな判定があったからこそ、互いにフェアに戦うことができた。」アスリートやコーチ、スタッフであれば、誰もがこのような思いを抱くことがあったのではないのでしょうか。

人類は、このような構成要素を、スポーツの中で育む大切な価値として生み出し、継承してきました。それは、今日では、単にスポーツの中でのみ尊重される価値ではなく、スポーツ以外の日常生活のさまざまな場面においても尊重される価値となっています。

以下では、フェアプレイを構成している自己を信じて、最善を尽くすこと (Excellence)、仲間を信じること (Friendship)、他者を尊敬すること (Respect) という、三つの要素について、具体的に考えてみたいと思います。

TOPICS

バドミントンの失格問題とフェアプレイ

ある国際競技大会でのバドミントン女子ダブルスの試合での話です。あるチームが決勝トーナメントで自分たちのチームよりも弱い対戦相手と当たろうとして、1次リーグの順位を操作するために、意図的に大差で試合に負けるというプレイを行いました。意図的に負けたペアの1人は、「私たちはすでに決勝トーナメント進出を決めているのに、なぜエネルギーを無駄に使う必要がある？」と話しました。

同じようなことが、他の試合でも起こりました。すでに決勝トーナメントに進出を決めていた2組のペアが、1次リーグの順位を操作して、決勝トーナメントでより弱い対戦相手と当たろうとして、意図的に負けるプレイをしたとみられています。

ベストを尽くして本来の力を発揮しなかった8人の選手たちは、結局、国際バドミントン連盟により失格処分にされました。また同連盟は、これを機に試合内外でのフェアプレイを推進するキャンペーンを開始しました。



失格問題に発展した女子ダブルス

1 ウサイン・ボルト選手のロンドン・オリンピック

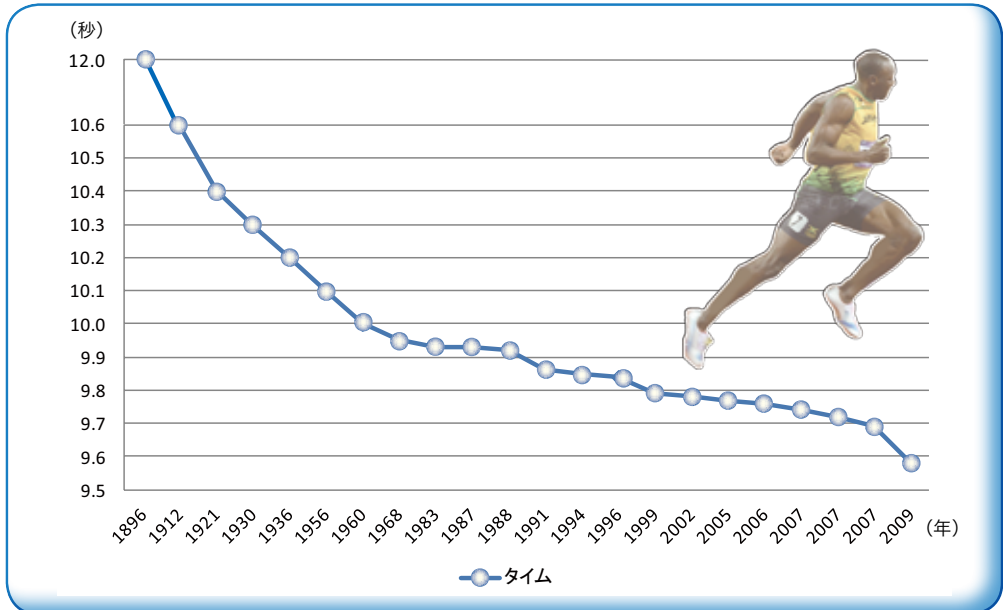


図1 男子100m走の記録の変化 (2012年9月現在)



1984年ロサンゼルス、1988年ソウル・オリンピック男子100m走で優勝し、一時代を築いたカール・ルイス選手

人類は、どれほど速く走ることができるのでしょうか。図1に示した男子100m走の世界記録は、この問いに答えようとしてきた人類の挑戦の過程を示しています。

1896年の第1回近代オリンピックでは、12秒0が優勝タイムでした。それから今日に至るまでの120年近い時間をかけて人類は、2秒強の時間を短縮してきました。そして、2012年現在の世界記録保持者が、ウサイン・ボルト選手です。

彼は、ロンドン・オリンピックでは100m走だけではなく、200m走でも優勝しています。しかし、彼は何の努力もせずに、勝利を手に入れたわけではありません。実際、

ロンドン・オリンピックの前に開催された6月のジャマイカ選手権100m走では、けがもあり、ヨハン・ブレイク選手に敗れています。そこから、調整をし、本大会では優勝しました。

また、ボルト選手は^{せきちゆうそくわんしょう}脊柱側弯症を抱えています。その彼は、どうやれば速く走れるようになるのかという質問に、「一生懸命、練習するだけだよ」「トリックみたいなことは何もない」と答えています。しかし、彼は、ただ練習量が多ければよいといっているわけではありません。

彼は、目標を達成するために改善すべき点を常に見つけようとしていました。その結果が、優勝でした。優勝した後、彼は、次のように語っています。

「今シーズンやってきた厳しい練習が全部、頭の中によみがえってきた。小さな問題があったけれど、練習を押し通した。達成できてとても幸せだし、誇りに思う。一生懸命練習すれば、ちゃんと見返りはある。」

このように、優れた記録を残しているアスリートたちは、自らが設定した目標の実現に向けて、自分に正直に、自己のベストを尽くしています。



2012年ロンドン・オリンピック男子100m走決勝9秒63のオリンピック新記録で優勝したボルト選手



ロンドン・オリンピックの男子200m走決勝でも優勝したボルト選手

2 吉田沙保里選手のオリンピック3連覇

人は尊敬できる先人がいることで、より高い目標を持ち不可能を可能にすることができます。この最たる例が、2012年9月時点でオリンピックや世界選手権で13連覇を達成したレスリングの吉田沙保里選手です。

表2 吉田沙保里選手の金メダルの軌跡

2002	テヘラン（イラン）・世界選手権優勝
2003	ニューヨーク（アメリカ）・世界選手権優勝
2004	アテネ・オリンピック優勝
2005	ブダペスト（ハンガリー）・世界選手権優勝
2006	広州（中国）・世界選手権優勝
2007	バクー（アゼルバイジャン）・世界選手権優勝
2008	北京・オリンピック優勝
	東京・世界選手権優勝
2009	ヘルニング（デンマーク）・世界選手権優勝
2010	モスクワ（ロシア）・世界選手権優勝
2011	イスタンブール（トルコ）・世界選手権優勝
2012	ロンドン・オリンピック優勝
	ストラスコナカウンティ（カナダ）・世界選手権優勝



2012年ロンドン・オリンピック女子レスリング決勝戦でカナダのトーニャ・パービーク選手と対戦した吉田選手は勝利を確信してガッツポーズ



自己の可能性を信じて成長する（北京、ロンドン・パラリンピック車椅子テニスで2連覇した国枝慎吾選手）

2012年ロンドン・オリンピック・レスリング女子フリースタイル55kg級金メダリストの吉田選手は、ロンドン・オリンピックで3連覇した後に開催された世界選手権で優勝しました。その結果、男子グレコローマン130kg級のアレクサンドル・カレリン選手（ロシア）の12連覇の記録を塗り替え、レスリングの世界大会で男女を通じ、最多の13連覇を達成しました。吉田選手は、この世界選手権後にも、14連覇を誓っています。

吉田選手は、偉大な先人の記録を塗り替えただけでなく、「死ぬまで抜かれない記録を作りたい」と語っていました。いうまでもなく、先人が達成した偉大な記録を新しく塗り替えるには、自らを厳しく律しながら、想像を絶する努力を続けることが必要とされます。

不可能と思えることを可能にした吉田選手の努力は、人間の無限の可能性を私たちに示してくれています。いつの時代でも尊敬し得る先人は、私たちが目指すべきロールモデルとなります。同時に、尊敬し得る先人を越える努力を通して、後に続く人々から尊敬される人物へと成長していくことが可能になります。

「競技の世界では結果がすべてであり、そこまでの過程については問題ではない。」このように指摘する人もいます。しかし、ボルト選手や吉田選手の言葉は、自身の最善を尽くしていくことそのこと自体に価値があることを示しています。

この自己の最善を尽くす過程で人は、越えられない困難に何度も直面します。そして、それを克服していく過程で、自分の新たな可能性を見い出していくことになります。それは、まさに自分に嘘をつかず、自分の可能性を信じていくことの大切さをアスリートだけでなく、すべての人々に示してくれます。「不正をしてもばれなければ問題はない」という誤った考えが、自分の可能性を信じる力を奪うともいえます。



吉田選手の最大の武器は避けることが困難な高速タックルである

「トップアスリートであり続けることは、常に自分に克つこと。スポーツの本当の戦いは、自分との戦いです。毎日のトレーニング、食事のコントロール、メンタルの強化など、一つずつ実践していくのはあくまで選手自身、まさに自分との戦いです。こうした実践を積み重ねた上で対戦相手に勝負を挑み、手にした勝利だからこそ意味があると、僕は考えます。」



2012年ロンドン・オリンピックでの太田雄貴選手

1 北島康介選手のロンドン・オリンピック

2012年ロンドン・オリンピック直前、北島選手のライバルであったダーレ・オーエン選手が急逝きゅうせいしました。2011年世界選手権でダーレ・オーエン選手に敗れ4位に終わった北島選手にとっては、「打倒ダーレ・オーエン」こそが

ロンドンへのモチベーションだったといえます。実際、オリンピック、世界選手権を通じて、北島選手が100m平泳ぎのメダルを逃すのは10年ぶりでした。北島選手は、オリンピック前に「自分より速い記録がある以上、それを超えたい」と語っていました。それが、ダーレ・オーエン選手のもつ58秒71の記録でした。

その北島選手は、2012年の日本の代表選考会の100m平泳ぎで日本記録を更新して優勝す

るとともに、200mでも優勝し、4大会連続のオリンピック代表を決めました。しかし、ロンドン・オリンピックの100m平泳ぎでメダルを獲得したのは北島選手ではなく、「ポスト北島」といわれ続けた立石諒選手でした。

このことに関して北島選手は、次のように語っています。「最後に自分らしさを出せたので悔いくはない。諒がきちんとメダルをとってくれたので、いうことない。」

水泳は個人種目といった印象をもたれがちです。しかし、この北島選手の発言にみるように、チームジャパンとしての結束力は、個人種目であっても発揮されます。さらに、その思いが結実したのが、メドレーリレーでした。



2012年ロンドン・オリンピックの100m平泳ぎでメダルを獲得したのは立石選手(右)だった



2008年北京オリンピックでは100m、200m平泳ぎで優勝した北島選手

北島選手はメドレーリレーの時点で、100mで5位、200mで4位と2012年ロンドン・オリンピックにおいて、メダルを獲得できないという状況でした。その「北島選手にメダルを！」このような思いで北島選手、藤井拓郎選手、松田丈志選手、入江陵介選手が泳いだ結果、日本チームは男子メドレーリレー初の銀メダルを獲得しました。

メドレーリレーのメンバーは、「康介さんを手ぶらで帰すわけにはいかない」と誓い合ったといます。同時に、3人は北島選手に遠慮なくアドバイスしたといます。その結果、北島選手は、平泳ぎの選手のトップの記録で2位のまま松田選手に引き継ぎました。

試合後、北島選手は「みんなのおかげです。感動、悔しさ、チームとしての喜び、オリンピックで成長させてもらったと思う」と語っています。

仲間を信じることで成長していける。しかし、この過程はアスリートの間だけに生まれるものではありません。たとえば、本気で水泳を辞めようとした立石選手に泳ぐことを続けさせたのが堀川博美さん、石井宏さんでした。高校時代の水泳部顧問、堀川さんは、訪ねてきた彼に「オリンピックに行かずに辞めるのか」と論^{まじ}したといます。また、石井さんは当時アメリカにいた立石選手に「一生悔いるから戻ってこい」とメールを送りクラブの高城直基コーチに引き合わせました。立石選手は「僕はいろんな人に支えられて本当に幸せ者です！」とツイートしたといます。



2012年ロンドン・オリンピックの男子400mメドレーリレーで銀メダルを手に声援に応える日本チーム



2012年ロンドン・オリンピックの女子400mメドレーリレーで銅メダルを見せる（左から）上田春佳、加藤ゆか、鈴木聡美、寺川綾選手

2 なでしこジャパンのロンドン・オリンピック

ロンドン・オリンピックの後、なでしこジャパンのキャプテン、宮間あや選手は、次のように語っています。

「この大切な仲間たちに、ありがとうの一言しかありません。このメンバーで戦えたことを幸せに思う。この先、代表の活動はなくなるけど、みんなのことはいつまでも心の中にいるよ。自分を信じることもそうだけれど、仲間のこと

とはもっと信じよう。」

その宮間選手は、ロンドン・オリンピックの前には次のように語っていました。

「佐々木監督になって5年間、積み上げてきたものがあります。結果がどうであれ、自分たちがあるべき姿でピッチを後にすることができれば一番いいかなと思います。ただ、がむしゃらに頑張ったからオッケーではなく、積み上げてきたものをしっかりと出し切る。その結果が金メダルになることを信じています。

今のなでしこは、本当にユニークで素敵なメンバーばかりです。どんな結果になろうと『かけがいのないメンバーでサッカーがやれて幸せだった』と思えるような、そんな大会になればいいと思います。」

このように語った宮間選手は、合宿



2012年ロンドン・オリンピック女子サッカー決勝戦



2012年ロンドン・オリンピック女子サッカー決勝戦でアメリカ選手と競り合う宮間選手

に新しく入ってきた選手に積極的に声をかけている姿が印象的だったそうです。しかし、彼女自身は、^{きづか}気遣いから意識的に話をするのではないといいます。むしろ、チームとして全員が同



ロンドン・オリンピック女子サッカーなでしこジャパンは銀メダルを獲得した

じ絵を描けるように話をするところがあるそうです。また、チームメイトに対して積極的にコミュニケーションをとっていくのは、自分にとって楽しいし、仲間が自分を受け入れてくれるからだと言っています。

しかし、2011年のワールドカップでは、少しでも暗い表情の選手の部屋に押しかけては話し相手になっていたともいいます。「せっかくメンバーに選ばれたのに、つらいだけで終わってほしくない。少しでも楽しんでほしかったから」という理由からだったそうです。

彼女はまた、^{さわほまれ}澤穂希選手が離脱していた時期にも、一方では代わりに出場していた選手を称賛しつつ、他方では「澤さんは必ず帰ってくる」と発言していました。そして、銀メダル獲得後に次のように話しています。

「準決勝後の涙は、チームを引っ張ってくれた澤さんにメダルをかけてあげられると思ってうれしかったのと、仲間への感謝だった」と明かしました。

自己の可能性を信じて、最善の努力を積み重ねていく、その過程で、私たちは信頼できる仲間と出会ったり、自分が多くの人たちに支えられていることを改めて実感し、感謝することになります。スポーツは、まさに、このことを直接的、間接的にスポーツに携わるすべての人々に経験させてくれます。



2012年ロンドン・オリンピック女子サッカー決勝戦でアメリカの選手と激しく競り合う澤選手

1 女子マラソン有森裕子選手の例



1987年世界陸上選手権女子マラソンで優勝したモタ選手



バルセロナで銀、アトランタで銅とオリンピック2大会連続でメダルを獲得した有森選手

スポーツは、多くの人たちが直接的、間接的に知り合う機会を提供してくれます。そして、この過程で、尊敬できる他者と出会うことで、人はより一層成長していくことができます。アスリートもまた、オリンピックに参加することを通して、そのような人の出会いを経験していくこととなります。有森選手の出会ったライバル選手たちをめぐる話は、そのような尊敬できる人との出会いの素晴らしさを伝えてくれます。

有森選手は、ポルトガルのロザ・モタ選手から最も大きな影響を受けたといます。

たとえば、初マラソンを走る前にモタ選手とハーフマラソン 10km を一緒に走ったことがありました。この時に、「もしかすれば追いつけるかもしれない」という印象をもったそうです。このような出会いの中で、やがて有森選手は誰かを憧れの対象にしなくなったといます。憧れるとその人を越えられなくなるような気がしたからだということです。

そのモタ選手は、有森選手が日本最高記録を出した際、電報を打ってきたといます。また、東京で開催された世界陸上選手権では、24km 付近でモタ選手が脱落する時、「イケル」と有森選手に声をかけたといます。さらに、アトランタ・オリンピックでは、ポルトガルの親善大使として現地に來ていたモタ選手が、スタート前にやって

きて「あなたは勝てるから、頑張る。応援しているから」とわざわざ励ましてくれたといいます。

有森選手は、同じような励ましを他の外国人選手からも受けています。1991年の大阪国際女子マラソンではカトリン・ドーレ選手が、優勝争いをしていた有森選手にスポンジを差し出してくれたといいます。そのドイツのドーレ選手は、試合前にいつもニコニコと笑顔で接してくれたとのこと。ロシアのワレンティナ・エゴロワ選手からは、勝負にかけるハングリーさを学んだといいます。

有森選手は1992年バルセロナ、1996年アトランタの2回のオリンピックに出場し、銀、銅の二つのメダルを獲得しました。しかし、彼女はバルセロナ・オリンピックの後、走れない時期を過ごしていました。その彼女が、ある人の言葉がなければ自分はアトランタのスタート・ラインには立っていなかったといいます。その人物が、山下佐知子選手でした。

山下選手はアトランタ・オリンピックが開催された年の正月、「たのむから、スタート・ラインにだけは立ってくれ」と記した年賀状を送ってきたといいます。山下選手は、バルセロナ・オリンピック前年の世界陸上選手権で有森選手と一緒に走り、みごと銀メダルに輝きました。しかし、残念ながらアトランタの選考レースでは、持病で出場を断念しました。

バルセロナ以降、長らく走れなかった理由を一番理解している山下選手の言葉がなければ、有森選手はアトランタにいなかったといいます。

目指すべき、尊敬できるアスリートがいるからこそ、自分も成長していくことができるといえます。



1980年代から1990年代にかけて活躍した旧東ドイツのドーレ選手



山下選手は1991年名古屋国際女子マラソンで優勝し、世界陸上選手権では2位となる

2 なでしこジャパンの例

「ピッチ上の 22 人全員が味方に見えた。」(川澄奈穂美選手)
「最高の舞台で最高の仲間と、最高の相手と戦えてよかった。」(澤穂希選手)

これらは、ロンドン・オリンピック女子サッカーチーム、なでしこジャパンの川澄選手と澤選手の言葉です。これらの言葉からは、試合の対戦相手は倒すべき相手ではなく、互いを高め合う、尊敬すべき仲間であるといった考えを読み取ることができます。同じ印象は、オリンピックの決勝戦の対戦チーム、アメリカからも発せられています。

「日本がどうやってボールをつないでキープしているか、今夜、世界中の指導者がそれを見たはずです。」

これは、アメリカのスUNDERGE監督の称賛の言葉です。

このように、仲間や対戦相手に対する尊敬の念が、自分のパフォーマンス向上の大きな契機けいきとなっています。宮間選手の言葉は、それをさらに裏づけてくれます。彼女は、サブメンバー時代を振り返り、次のように語っています。

「サブメンバーの重要性はわかっているつもりですし、サブメンバーが試合を決めるといっても間違いではない。試合が終わる時にピッチに立っているのもサブメンバーだし、試合が始まる前に相手選手の役を演じるのもサブメンバー。本当にサブの力は重要なんです。私が試合に出るようになって、先輩からも、後輩からも、いろんなことを学んできたつもりです。……確かに苦しい時代を知っているのと知らないのとでは、差が出ることもあると思います。でも、そういう経験をした自分たちが、今後もその思いを背負っていけばいい。今の若い選手たちはこれからの大変



ロンドン・オリンピック決勝戦へいざ！



ロンドン・オリンピックで活躍した川澄選手

な時期を背負っていかなければなりませんから。つらい思いをしたから良い悪いなんてことは全然なくて、なでしこにとって一番大切なのは、自分の周りにいる人たちに対して、尊敬の念をもって接することができるかどうか、だと思います。だから、年齢が上であろうと下であろうと、人をバカにした態度をとる人は好きではないし、許せない。

でも、そんな選手はなでしこジャパンにはいません。もし、そういう選手がいたとしても、それは上には登っていけない選手でしょうから。」

自分を高めてくれるのは、仲間や対戦相手だけとは限りません。憧れの選手もまた、自分を高める大きな原動力になります。川澄選手と澤選手の関係は、その一例です。

2011年女子ワールドカップ・ドイツ準決勝で、川澄選手は大会初先発に^{ぼってき}抜擢されました。そして、この試合、60分に勝ち越しゴールをあげた澤選手が、最初に、川澄選手に駆け寄ってきたといいます。そして、決勝戦では、高々とワールドカップを掲げる澤選手のすぐ隣に川澄選手がいました。この時、川澄選手は、憧れの人と一緒に世界一になるという夢を叶えることができました。この瞬間を彼女は、「一生に一度あるかないか。本当に楽しかったです」と振り返っています。

二人は、1998年1月に国立競技場で出会っていました。

この時、澤選手は19歳、川澄選手は12歳でした。「小学生の時から憧れの人で、目標とするプレイヤーでした」と川澄選手は語っています。

このような尊敬できる仲間や対戦相手との出会いは、スポーツの場面だけではなく社会の多くの場面で生じ、人々を成長させてくれるともいえます。



ゴール後に抱き合って喜ぶ澤選手と川澄選手



FIFA女子ワールドカップ・ドイツ2011の表彰式



© Damir Sagolj/Reuters

後世に語り継がれるスポーツの名勝負があります。しかし、それらの名勝負は、勝者だけではなしえず、常に対戦者によって勝者のより高いパフォーマンスが引き出されて可能になるといいます。それは、対戦者にしても同じです。互いに競い合った選手たちは、より高い^{いただき}頂を目指し、互いに共同してそれを成し遂げたパートナーともいえます。しかし、パートナーに対する尊敬の念が表現されることは、それほどありません。

写真は、2012年ロンドン・オリンピックの女子サッカーの準決勝、日本とフランス戦の後、勝者となった日本のキャプテン、宮間あや選手がフランスのアビリー選手に語りかけている場面です。2人は、アメリカの同じチームでプレイしていました。

2人が何を語り合ったのかは、不明です。しかし、勝利におごらず、失意の敗者をなぐさめる宮間選手とそれを受け入れるアビリー選手の姿は、彼女らが単に優れたプレイヤーであるだけでなく、真のスポーツパーソンであることを示しているとたたえられました。